

北海道読書推進運動協議会

北読進協だより

第15号 (優良読書グループ表彰特集号) 平成19年12月27日発行(WEB版)

十勝童話会 (優良読書グループ全国表彰)



(写真提供 十勝毎日新聞社)

< 特集 平成19年度優良読書グループ >

今年の優良読書グループ表彰は、帯広市の十勝童話会が全国表彰されることになり、秋の読書週間時期に合わせ、北海道表彰、北海道地域活動振興協会理事長賞と合わせて9つのグループが道内各地の授賞式において表彰されました。

本特集号では、今年の“優良読書グループ”のプロフィールを紹介します。

全国表彰 十勝童話会(帯広市)

北海道表彰 おはなしの会「ピノキオ」(千歳市) 他

北海道地域活動振興協会理事長賞

ひまわりのおはなしやさん(滝川市) 他

全国表彰(主催:社団法人読書推進運動協議会)

十勝管内 帯広市

十勝童話会

【団体の概要】

設 立 年 月 昭和 48 年

会 員 数 個人 17 名

優良読書
グループ表彰
代 表 者 名

平成 16 年度「優良読書グ
ループ北海道表彰」
あまのとしゆき
天 野 和 幸

十勝童話会は、テレビの普及により失われつつあった大人から子どもへの「語り」の大切さを残そうと、昭和 48 年に発足しました。

会では毎月 1 回、帯広市図書館においておはなし会を開き、絵本、紙芝居、パネルシアターを会員が交代で演じています。

また、会では昭和 51 年から「おはなしのせかい」と題した会員による発表会を年 1 回開いて、自己研鑽の場とするとともに、より多くの子ども達にお話の世界の楽しさを伝えていきます。

幼稚園の園長先生でもある代表の天野さんにお話をお伺いしました。

はじめた頃

会の活動がはじまった昭和 40 年代の後半には、まだ今のように「読み聞かせ会」というものが珍しかった時代だそうです。子ども達は、丁度普及してきたテレビマンガに夢中で、家庭では“顔はテレビに向けたままナマ返事”という姿が普通に見られるようになっていて、家々で親から子に語り伝えられてきた「むかしばなし」や「童話」が生きていた「顔を向け合って話を交わす生活」の世界は、どこかに置き忘れられたものを感じていたそうです。

そんな中、昭和 46 年に市立図書館で行われたお話の講座を受講した天野さんと、それから同じ思いを持った幾人かが、図書館の誘いに試しに「お話し会」を開いてみたところ、何十人もの親子連れや幼児、小学生が集まってきたそうです。ある意味「飢えていた」ように



感じられたそうです。そして、人から人に語り話すことの大切さに改めて自信を深めることになりました。

読み手が足りない

大勢の子ども達が図書館に足を運んでくれるようになり、常連の子どもも現れるようになりましたが、困ったのが「読み手」の数が追いつかなくなったことだったそうです。新しく読み手になろうという人がいなかったのだそうです。

お話し会で、1~2回語りを務めた「にわか語りべ」が誘ってみても、「お話をする自信がない」と断られてしまうことも多かったそうです。

天野さんは、親や先生の口から聞くことによって得られる豊かな『お話し』の世界を経験していない人たちが数多くいることと、それから「お話し」を基礎から勉強して自信を持って語れるようになるための練習の場が無いことに気付いたそうです。

それならと有志が集まり、「お話し」の本を探して読んでみよう、先輩の話しを聞いて勉強してみようと呼びかけてみたところ、たちまち二十数人のメンバーが集まってきて、こうして十勝童話会は昭和48年に発足しました。

会の活動

十勝童話会では、発足以来欠かさずに、毎月お話し会を行っています。現在は、帯広市図書館において、「土曜童話会」と題して第1土曜日に開催しています。

この土曜童話会の他、「おはなしのせかい」と題した会員の研修成果を発表する機会を兼ねたお話し会を年1回開催しています。昭和



51年以降続いている「おはなしのせかい」は、今年で29回を数えます。また、ここ近年の開催場所は、市内各所のコミュニティセンターを会場に開催することにしていて、できるだけ多くの方が「お話し」の世界に触れることが出来るよう、その地域の幼稚園、保育園にも案内状を出して参加を呼びかけるなど、「お話し」の世界のPRと地域への広がりにも配慮したそうです。平成19年からは、新しくなった帯広市図書館において開催しています。

十勝童話会が目指すもの

会では、当初から次の目標を持って活動を続けているそうです。

- ・ たくさんの人をここに集めるのが目標ではない。家庭で親子の語らいや、教室で先生が生徒に親しまれる時間を増やす“きっかけ”になれば良い。
- ・ 参加者の数を競って派手な活動をし過ぎて燃え尽きないこと。小さな炎でも移して引き継げる「蠟燭の炎」のような活動を目指し続ける。

天野さんは、派手なことはせず、ただ淡々と「お話し」を広めていくこと。親子や兄弟、大人と子どもが生の声で話し、話を聞くという“当たり前”のことが地域に広がり、当たり前そこに存在しつづける。十勝童話会の活動は、そのための地道で地味な活動でしかない、といます。

今回の全国表彰の受賞の報らせにも、これほどまでの地道な活動が認められたことに驚くとともに、これからも続けて行く確かさを大いに感じとったそうです。

これからの会の目標について天野さんに尋ねてみると、何にも変えるつもりはない、との答えが即座に返ってきた。めまぐるしく変革が求められ、世の中や子ども達の世界にもひびきが生じている今だからこそ、これまでに培ってきたことをこれからも変えずに守り伝える自分たちの活動は大切なのだそうです。



インタビュー余話

会の目標について聞いていた時のこと。発足当初からの年会費 300 円も含めて、変わらないところが十勝童話会の原点でありこだわりだ、と言っていた天野さんでしたが、重ねて訊くと、「皆で、お話し」の原点であり“語り”のふるさとでもある岩手県の遠野に行けたらいいなあ。まあ夢見たいなものだけど」と自嘲気味に語ってくれました。会員に無理な義務や目標は求めず、苦労は無い、と言い切る天野さん。本当に好きなことをやっているだけですから、との言葉がとても印象的でした。

北海道表彰

石狩管内 千歳市

おはなしの会「ピノキオ」

【団体の概要】

設 立 年 月 昭和 61 年

会 員 数 5 名

代 表 者 名 ひがしかたひろみ
東 方 弘 美

おはなしの会「ピノキオ」は、緑豊かな千歳市のニュータウン、泉沢向陽台地域が生まれたばかりの頃に誕生した地域の読み聞かせグループです。昭和 61 年の発足第 1 回目のお話し会は小さな町内会館の 2 階でした。当日は、テレビっ子たちが絵の動かない絵本を読む会などに本当に来てくれるのかと心配したそうですが 100 人を超す親子が廊下まであふれる盛況ぶりだったそうです。

やがて、昭和 63 年の新図書館のオープンを契機に、市立図書館にも活動の場を求め、現在は市立図書館を主な活動場所としながら、市内の育児サークルや小学校にも出向いて活動の場を広げる「ピノキオ」代表の東方さんにお話を伺いました。



会の活動

会の活動は、市立図書館で行っている定例のお話し会が月 1 回。昨年度は 223 人の参加があったそうです。主に乳幼児を対象にして紙芝居、パネルシアター、指遊び、折り紙教室なども開いているそうです。千歳市の生涯学習まちづくりフェスティバル『ふるさとポケット』にも他の読み聞かせボランティアグループと共に出演しています。

発足以来のおはなし会は 380 回を超えてなお継続しています。

続ける自信がついた

東方さんは発足当初からの会員だったわけではないそうですが、入会までの経緯について尋ねたところ、仕事を持っている関係でそれまでは読み聞かせのグループに入ることまではとても無理だと考えていたそうです。そんな時に、「ピノキオ」に出会い、「ピノキオ」の活動が生活パターンのリズムを崩すことなく参加できたのが良か

ったと話します。その活動が今日まで続いてきているそうです。会ではそれぞれの会員が無理なことはしないと決めているので、東方さんも特に大変だと感じたことは無かったそうです。といっても、1人で定例のお話し会を切り抜けなければならなかったこともあったそうですが、「むしろ続けられる自信がついた」とあくまで前向きな東方さん。逆に、楽しかったことは？と訊くと、参加している会の活動自体がみんな楽しいと感じられるように心がけているのだそうです。

自身の子どもに対する読み聞かせの経験から、もっと読みたい本を気楽に読んであげられる余裕があったらとの思いもあって、今のお母さんにそういう気持ちを伝えたいと、今年の会の活動方針は、「地域の子どもたちに本の楽しさ、おはなしのおもしろさを伝えると同時に、お母さん達にも興味を持ってもらえるよう働きかける」という内容にしたそうです。

受賞に際して

北海道表彰の受賞については、地味な活動であるお話し会をコツコツと続けてきたことが評価されたことが大変うれしい、そして、会を創り育ててくれた先輩たちに感謝したいと東方さんは話しました。

読み聞かせ会の最終的な目的は「家庭」にあるといいます。「今のお母さんは、子どもに字を読ませたがるけど、もっと素直に絵を一緒に楽しんでみることを勧めていきたい」とのこと。

絵本を通してその楽しさを親子で共有し、読書の習慣を各家庭で根付かせてほしい、そのための“きっかけ”作りが「ピノキオ」の目指す活動なのだそうです。



北海道表彰
石狩管内 江別市

読み聞かせボランティアの会

【団体の概要】

設立年月	平成 13 年	代表者名	横井 優子
会員数	54 名		

江別市では平成 13 年度から「地域一体型・学校顔づくり事業」と題して、市内の各小学校が主体的に実践項目を企画立案させ、教育力の向上を目指す取り組みを進めています。東野幌小学校は二つの実践項目を挙げ、その内の一つ「読み書きを身に付け、読書を愛する子どもを育てる実践校」という、読書を学校の顔にする取り組みの中で生まれたボランティアグループです。の「読み聞かせボランティアの会」

平成 13 年発足と歴史は浅いものの、50 名を超える市内最大級の読書ボランティアグループについて、代表の横井さんと自分の役割は会と学校の橋渡し役と話す東野幌小学校学校図書室担当の中畑亜紀子さんにお話を伺いました。

選べるボランティア活動

当初は、学校が基点となって作られた読み聞かせボランティア活動でしたが、初代の代表の菅井さんをはじめ会のメンバーがすぐに“お話しと読み聞かせ”の世界に吸い込まれ、積極的に活動するようになるのには時間はかかりませんでした。

「読み聞かせボランティアの会」の活動は、読み聞かせのボランティア活動と本の修理や図書室の清掃など環境整備の二本立てです。さらに、読み聞かせは、「朝の読書タイム」、昼休みの「なかよしタイム」をどちらか、または両方選択することができ、自分の興味や時間に合わせ、無理なく参加できるようになっています。このため、それまでの PTA 活動とは全く関わりなく始められたボランティア活動に、子どもたちと接していたい人、本の修理など手を動かすのが好きな人などが主体的に入ってくるようになったそうです。



現在の活動内容

「読み聞かせボランティアの会」では、休み時期を除いた毎月 1 回、15 分間の朝の読書タイムを利用して読み聞かせ会を手分けしてすべてのクラスで実施しています。平成 18 年度

は、18回に分けて延べ208学級で読み聞かせを行いました。読む本は読み手の選択に任せているので、各自市立図書館や学校図書室、自前で購入するなど好きなものを読んでいるそうです。昼休みの「なかよしタイム」(自由参加、25分)は、月1回。自由参加なので低学年から高学年まで一緒に楽しめます。12月には「なかよしタイム」の特別版となる「クリスマス・スペシャル」も開催して、クイズやハンドベル演奏も行うなど、音楽室は200名近くの子どもたちであふれかえります。

さらに、学校と共催で研修を兼ねた絵本講演会を年1回開催しています。平成17年、18年の絵本講演会には、絵本パフォーマー岸田典大さんを講師に迎えて地域住民にも参加を呼びかけて開催しました。図書整備は、学期毎に1~2回開催します。

「読み聞かせボランティアの会」の活動は子どもたちにどのような効果をもたらしているのか。中畑さんは、朝の読書活動の効果とともに、子どもたち、特に低学年児童の聞く力につながっていると考えているそうです。東野幌小学校では、学校の外部からやってきたお母さん達のお話しの、初めの頃は落ち着かない子もいたそうですが、今ではどの生徒も真剣に聞くようになってきているそうです。朝の読書で“読む”力を、お話しで“想像する”力を共に身につけてくれているように感じられるのだそうです。

これからも

代表の横井さんは今回の受賞に、ボランティアを受け入れ、活動しやすい環境を作ってくれた校長先生や教頭先生に感謝したいと話しています。初代代表を務められた菅井さんは、現在もOGとして「読み聞かせボランティアの会」に参加されているとのこと。さらに、来年にはお子さんが卒業する横井さんも、OGとしてぜひ活動を続けたいと話しています。



インタビュー余話

江別市では、昨年から市立図書館の司書を1校あたり3ヶ月ずつ学校に派遣して学校図書室の環境整備を進める試みを始めています。現在、図書室に派遣されている市立図書館司書と市内の小学校の図書室担当者有志で勉強会を月1回開いているそうですが、東野幌小学校と「読み聞かせボランティアの会」の活動はとても注目されていて、市内の他の学校への広がりも見られるようになってきているそうです。他の学校への広がりが今後期待されます。

北海道表彰

空知管内 岩見沢市

こども読書会ボランティア

【団体の概要】

設立年月 昭和57年

会員数 15名

代表者名 加勢 織江

応募により集まった市内の小学生が一年にわたって8冊の本を読んで語りあうという岩見沢市で行われている読書会活動が「こども読書会」です。毎年、単年度で募集して開催されるこのユニークな取り組みを25年にわたって続ける原動力となっているのが、毎年楽しみに参加している本好きの子どもたちと、それを暖かく支えてきた「こども読書会ボランティア」のボランティア活動です。

会長の加瀬さんに、こども読書会とボランティア活動の25年について聞いてみました。

こども読書会の風景

岩見沢市の「こども読書会」の発足は一中学校の校長先生が夏冬休みの時期の中学生を対象にした開いた読書会が元になっています。退職後、嘱託職員として市立図書館長となったのを契機に、現在は市立図書館の事業の一つとして実施するようになりました。

子どもたちの読書会は、5月から翌年3月にかけての毎月第一土曜日(4月、8月、1月を除く)に開催します。1～3年生はそれぞれ学年毎、4～6年生は参加者があまり多くないので合わせて一グループとして、合計4つのグループに分かれて読書会を行います。どうしても習い事が増えてくる高学年児童の参加者の減少が加瀬さんは残念だと話します。

1回の活動は、約2時間。各回1冊の本について、読み聞かせ、読み語り、輪読、朗読、黙読、台詞ごとの劇化など形を変えて楽しみ、読み解いていきます。輪読のところでは、お母さんやお父さんも読み手に入ってもらっているそうで、われ先にと読みたがる子どももいるとのこと。明るい雰囲気伝わってきます。読後にはみんな感想を話し合ったり、感想画を描いて読書ノートも作っています。12月にはクリスマス行事を行い、この月のテキストはお休みです。



平成 18 年度は 9 回開催して、大人 18 名と幼児 11 名を含む延べ 361 名がこども読書会に参加しました。

ボランティアとして

“こども読書会ボランティア”の活動は、年度初めの準備作業に始まります。各学年、4～6 年生のグループにはそれぞれ担当が決められ、前年の 3 月から 5 月にかけて開催する例会で集団読書用の図書を選定します。

加瀬さんに、ボランティアとして“こども読書会”の子どもたちとの接し方の基本について聞いたところ、感性を尊重することだという。内容や感想は子どもそれぞれに任せて、「指導」することもほとんどないそうである。特に“否定”はしないようにしているそうで、「知識としての本も大切だが、摘み草の場面が出てくる本の時には野外に連れ出して“風の音を聞いてごらん”と聞き耳を立てるような「体験」を通して、子どもが本に触れて親しむことと感性が結びつくということを大切にしてほしいから」と話す。

会の活動を通して子どもたちに伝えていきたいことについて、「今の子どもたちは何でもよく知っているが、“知ろうろうとする姿勢”を持つことはもっと大切だと思う」という答えが返ってきた。その姿勢を大切にしたいからと、読書会自体はあくまで楽しくというのが基本だが、家に帰った後でも構わないから、問題に対して、自分がどうしてこういう気持ちになったのか、といった気持ちの変化や動きに自分から気がついて欲しいのだそうです。

インタビュー余話

反省しながらの 25 年間と、謙遜して話しておられた加瀬さん。毎年の本の選定では市立図書館にも大いに協力してもらっているとのこと。読書会の参加を通してお母さん同士が友達になった例など、たのしいエピソードはつきない様子。これからも“こども読書会”を大切に支え育てていきたいと話していました。

北海道表彰

留萌管内 留萌市

ボランティアサークル

手づくり布の絵本「ひよこの会」

【団体の概要】

設 立 年 月

昭和 60 年

会 員 数

10 名

代 表 者 名 松 野 令 子

昭和 55 年の国際障害者年を契機に、市立図書館では目の不自由な子どもや手指のりハビリを必要とする障害を持つ子どもたち向けの布絵本の制作に取り組みました。「ひよこの会」は昭和 59 年度に市立図書館と婦人の家が共催した布の絵本づくり講習会をきっかけに、翌年、針を持つことが大好きだった同世代の仲間と共に結成されたボランティアグループです。

グループ名は、最初に手がけた布絵本「ひよこひよこ」からとりました。発足当初からのメンバーでもある代表の松野さんにお話しをお伺いしました。

これまでに制作した作品の数々

「ひよこの会」が 20 年あまりの活動で制作された作品の数々が実に見事で多彩。布の絵本 52 点、図書館の壁などを飾るタペストリー 15 点、エプロンシアター 17 点、指人形、童話人形 15 点などなど。一つ一つ人の手仕事を通して作られた温かみのある作品の数々が、これまでに 100 点以上生み出されてきたことになります。制作した作品は市立図書館をはじめ地域の児童センター、保育園などで子どもたちに利用されています。

「ひよこの会」は、平成 18 年度には、北日本図書館連盟の図書館事業功労者表彰も受賞しています。



特別なことでは・・・

今回の受賞にもそれほど心境の変化はないと松野さん。他の賞を受賞した時も同様、理由は賞をもらえるような特別なことは何一つしていないからだそうです。

それでは松野さんにとっての「ひよこの会」の活動とはどんなものなのか聞いてみたところ、「それこそ、月2回お弁当を持って、みんなのところに出かけるのが楽しみで。何より楽しくマイペースに来られたのがよかったのかも」との答えが返ってきた。冗談まじりに「ボケ防止も兼ねている」そうです。

これまで20年以上活動されてきて、初めは40名程の時期もあったが、一時は3～4名になったこともあり、古い公民館から旧図書館、新しくなった図書館へと活動場所を移しながら、現在は週2回市立図書館の会議室を利用して活動を続けてきている「ひよこの会」。楽しくマイペースといいながらも、布絵本の草分けの札幌市の“ふきのとう文庫”の講習会にも出かけて技術を学ぶなど、勉強熱心な面もしっかり併せ持っています。

留萌の街のタペストリー

今年は、これまでに図書館に寄贈された素晴らしい作品を多くの市民に知ってもらいたいと、市立図書館で「ひよこの会」の作品展を秋に開催しました。松野さんも自分たちの作った作品を手にとって遊ぶ子どもたちの姿を楽しみにしているそうです。

「ひよこの会」の今後の目標について尋ねたところ、留萌の地図のタペストリーを作りたいとのこと。

留萌の街で暮らし、毎月市立図書館に集まって、楽しい仲間とおしゃべりをする。子どもたちと留萌の街が大好きな皆さんの作るタペストリーの地図が図書館の壁を飾る。今から楽しみです。



北海道表彰

胆振管内 白老町

おはなし会トトロ

【団体の概要】

設立年月 昭和61年

会員数 12名

代表者名 平松幸子

白老町の町立図書館では乳幼児を対象にした「らっこランド」と小学校3・4年生位までを対象にした「おはなしランド」の二つのおはなし会を毎月開いています。「おはなし会トトロ」は、町が広報で募集した第1回の「おはなしランド」のボランティアに応募したメンバーによる読み聞かせグループです。現在の名前になったのは平成3年から。

おはなし会トトロの活動

「おはなし会トトロ」はとても10数名のグループとは思えないほどの多彩な活動を行っています。ざっと上げただけでも、例会にあたる町立図書館の「おはなしランド」が毎月1回、町立図書館のブックスタート事業にもこれも毎月、萩野小学校の「図書館まつり」、商工会主催のイベント



や、製紙の町白老ならではの「白老町紙フェスティバル」にも出演しています。さらに、白老町教育研究会や町民向けの読み聞かせ講習会の講師も務めています。さらにまだあります。トトロに参加しているメンバーは、自分たちそれぞれが住んでいる地域においても、育児サークルでの読み聞かせに行ったり、小学校でも読み聞かせを行ったり、福祉施設における読み聞かせも行っているというから驚きます。その辺の“トトロの秘密？”について、代表の平松さんにお話をお伺いしました。

無理なく、楽しく

昨年20周年を迎えたトトロですが、会員の数はここ数年安定しているそうです。とはいえ、転勤族の家族の方も多く、会員の入れ替わりは“そこそこ”あるそうですが安定した活動を続けてきました。会が長年にわたって活躍されている秘訣は“無理はしない”を基本に活動している”ことに尽きるそうで、マイペースを21~22年続けてきただけだという。「とにかく楽しくやって来られてさらに賞ももらえることはうれしいけれど、本当にたいした事をしている実感はないんですよ」と笑う平松さんですが、それにしても活動が幅広い。本当に大丈夫なのですかと聞くと、「活動自体は楽しいから“大変”じゃない」、あとはそのための時間をどう

して作り出すかということなので、そこはその時間にできる人に割り振ってしまうのだそうです。ですから、例会にあたる月1回の「おはなしランド」といっても、みんなが集まるわけではなく、本当に今月は何にもしない月、そういう月もあるから無理なく「大丈夫」なのだそうです。

地域で活動するということ

こうした活動が広く知れ渡っている「おはなし会トトロ」ですから舞い込む依頼もおのずと幅が広がります。「幅広い活動ですが、会員の誰かが対応できる場合に限って話を受けているので、“必ず”ではなく「この月なら都合がよいから引き受けますよ」といった具合に、気が付いたらいつの間にか増えてしまっただけ」といいます。

平成9年には「おはなし会トトロ」が中心となって白老のアイヌ民話絵本を作成したり、アイヌ語による読み聞かせを行ったりと地域的な視点も忘れない。商工会のイベントにも気軽に参加するなど地域に根付いた活動実績には優れたフットワークが見られます。



最近では小学校の新入生クラスの保護者懇談会の時間に、別室で待っている児童のためにおはなし会を開きました。身近に望まれる小さな依頼にも気軽に応える幅広いボランティア活動の懐の深さがうかがえる「おはなし会トトロ」です。

インタビュー余話

平松さんほかのみんなの苦しみ(楽しみ?)はといえば絵本選び。一人ひとりの子どもの顔を思い浮かべながら「この辺はきっと怖がってくれそうぞ」と選んでいるそうです。本の選択は各自に任せられているそうです。

最近、長年「おはなしランド」に参加してくれている小学上級生が、“小トトロ”(コ・トトロと読みます)として「おはなしランド」にトトロと共に出演して、紙芝居の演じてを務めてくれるようになっているそうです。トトロを担う未来の人材が育つ日も間近かもしれませんね。

北海道地域活動振興協会理事長賞
空知管内 滝川市

ひまわりのおはなしやさん

【団体の概要】

設 立 年 月

平成 14 年

会 員 数

16 名

代 表 者 名 久 保 信 子

「ひまわりのおはなしやさん」は平成 13 年に成立した子どもの読書活動に関する法律をきっかけに、子どもたちに少しでも多くの「夢と希望」を与えたいとの思いから発足した読み聞かせのボランティアグループです。市内のほぼ全ての児童館で年間 50 回もの精力的な読み聞かせ活動について、代表の久保さんにお話を伺いました。

ひまわりのおはなしやさん

発足当初の読み聞かせは児童館ではなく、近所の子ども達に読み聞かせができれば良いねと集まった4名の有志により自宅を開放して始めたそうです。児童館に活動の場所を移したのは、より子どもが参加しやすく、また、読み聞かせに適した場所がないかなということで翌年から変えました。



会の名前の由来は、「太陽に向かって元気に咲くひまわりのように子ども達にももの／＼と育ててほしい」との願いから“ひまわり”としたそうです。当初は「×キッズ」のようなカッコの良い短めで覚えやすいものも考えたそうですが、これに活動内容が素直にわかる「おはなしやさん」を付けて現在の名前にしたそうです。でも、さすがに長いグループ名に最初は不安で、ボランティア登録の相談に訪れた市役所の担当者に「ちょっと長いでしょうか」とそれとなく訊いてみたところ、「いや～、いいんじゃない」と言われ安心したことも思い出の一つになりました。

今では、子どもたちからも親しみを込めて「おはなしやさん」と呼ばれているそうで、この名前で正解だったと「とても気に入っている」と久保さん。次に来るのが待ち遠しかった昔懐かしい「紙芝居屋さん」の雰囲気も味わって欲しかったのだとか。

活動内容

現在、滝川市内には 11 カ所の児童館がありますが、遠隔地の 1 カ所を除いた 10 カ所の児童館でおはなし会を開いています。開催時期は 8 月を除く 5～10 月の毎月 1 回。1 児童

館を二人一組で担当します。読み手はなるべく住まいが近い地元の児童館を割り当てます。近くに住んでいる会員がいない児童館には自動車を持っている会員が車で出かけることにしているそうです。

9月の予定では、12日2カ所、13日と15日は各1カ所、18日は2カ所、19日は4カ所でほぼ3時から3時半というほぼ同時刻に手分けして開いています。会員は毎月2カ所のお話を担当するのが一般的で、お話の時間は大体20分位で、2作品を用意します。お話しに使う本は、市立図書館やお隣の新十津川町の図書館から調達することも多いそうです。読み手によっては“読み聞かせ”だけでなく“紙芝居”を取り入れる会員もいます。

世代を超えた結びつき

一般的に“読み聞かせグループ”の設立には、市立図書館の講座修了生が中心となるなど数十人規模で発足というケースが多く見られますが、「ひまわりのおはなしやさん」については共感した“たった二人”の有志から出発している点でとても珍しいケースといえるかもしれません。16名という現在の会員数はそれほど多いものではありませんが、「ひまわりのおはなしやさん」には幼稚園の先生の経験を持つ会員から子育てを終えた50代の主婦、69歳の最年長会員まで、幅広い層が文字通り“集ってきて”出来上がったグループなのです。

会の発足について久保さんは、読み聞かせをはじめるとは二人で決めたが口コミを期待して小さな子を持つ二人の友達にも声を掛けて4人から発足したと話しています。子どもたちが子どもたちを呼び、お母さん達はその友達のお母さんと子どもをまた連れて参加する、というように“おはなしの輪”は広がり、発足から5年で会の活動は見事に軌道に乗るまでに成長しました。おはなし会に参加するお母さん同士が仲良くなった例など、「ひまわりのおはなしやさん」が活動を通してさまざまな人たちを引きつけ、さまざまな世代に「場」を提供してきた姿が窺えます。

「自分たちの活動は特別なことではなく、きっかけさえ見つかるようにしてやれば、(読み手などのボランティア活動を)やってみたいと思っている人はたくさんいる」という久保さんの言葉に5年間の人のつながりが現れています。

インタビュー余話

これからのことについては、活動はあまり広げすぎても負担になって続かないからとあくまで控えめな久保さん。目標はなんと69歳のおばあちゃん会員だそう。「重みというか、年輪というか。実に味わいのある紙芝居をしてくれる。真似できないけど、なってみたい」とあこがれに近いものを感じているのだとか。外部ではなく、グループの内部に“熟成”という目標がある。すてきな話である。

北海道地域活動振興協会理事長賞
留萌管内 留萌市

おはなしの会「もこもこ」

【団体の概要】

設 立 年 月 平成 13 年
会 員 数 18 名

代 表 者 名 齊 藤 嘉 子

おはなしの会「もこもこ」は市立図書館が募集したおはなしボランティアに応募した市民により、約1年間の実習や研修を経て発足した読み聞かせボランティアグループです。会の名前はもちろん谷川俊太郎さんの人気絵本からとったもの。毎月市立図書館で行われるおはなし会に参加するかたわら、なんと地元FM放送局にもレギュラー番組を持っているという。他に例を見ないユニークな活動について、事務局の浅沼亮子さんにお話を聞いてみました。

「もこもこ」広報部が毎月発行する会報「もこもこ通信」も現在70号を越えて刊行中。誌面は行事報告や今後の予定と各担当の割付表が載せられています。

おはなし会活動

定例の活動は市立図書館で月2回土曜日に開催される「土曜おはなし会」と月1回2歳児以下の乳幼児を対象に開催される「ちいさいこのおはなしかい」。他の読み聞かせグループと共に参加しています。おはなし会では“語り”や“わらべうた”、遊びなども取り入れてバラエティを持たせているそうです。

昨年のおはなし会には、土曜おはなし会が年間約280人、「ちいさいこのおはなしかい」が457人参加しています。参加人数は乳幼児とお母さんの両方が参加する月1回の「ちいさいこのおはなしかい」の方が多いそうです。

地域に広がる「読書」

おはなし会「もこもこ」はボランティアなど民間団体の活動を応援する助成制度も積極的に利用して各種の事業も開いています。（「子ども夢基金」（実行委員会形式）や「ニッセイ財団（児童・少年の健全育成助成“広がれ、元気っこ活動”）」）中には、絵本作家のあべひろしさんの絵画教室！などユニークなものもあり、多くの子ども達にも好評を博しています。今年の1月にはオリジナルの影絵紙芝居の作り方講習会を市立図書館で開き、東京の「すぎのこ文化振興財団」の下村明さんを講師に26人の一般市民や保育士、小学生を集めて開催したそうです。

コミュニティFM番組でおはなし会？

地域に溶け込んだ読書活動を広く進める「もこもこ」ですが、なんといっても特徴的なのが月2回オンエアされる地元FM放送局のレギュラー番組「もこもこタイム」を担当していることでしょう。

担当する昼1時からの50分間番組は留萌市街地を中心に半径30kmの海沿いの区域に電波が届くので、遠く増毛町や小平町の一部地域でも受信できるそうです。

番組を持つきっかけは平成16年に地元FM局『エフエムもえる』が開設された際に「もえる」のスタッフから番組を持ってはどうかと声をかけられたのが始まりだそうです。「あまり手を広げすぎると大変だぞ」と思いつつ結局は引き受け、ついには「見事にはまってしまう状態」と笑う。



放送ならではの苦労はと訊くと、「おはなしの会は割と簡単なのだけれども、リスナーが見えない状態で話すのは非常に難しかった」ということで、今年の1月には「ちょっと、遊びに来ない？」と常連の子ども達をゲストに呼んで実現させたのが上の収録風景。ゲストの3人の小学生にお母さんや友達も加わって大賑わいの収録風景になったそうで地元新聞にも大きく取り上げられました。当日は3人の小学生がそれぞれおはなしを披露したり、冬休みの思い出話しをしたりと、楽しい収録になりました。

読書を通して

ハデさばかりに目を奪われがちですが思わぬ効果もあると浅沼さん。「スタジオはメディアという新しい世界に作られた発表の場」という。ラジオ放送は生番組なので出演は休み時期だけですが、同年代の子どもたちも聞いてくれているということで子ども達も緊張していつもと違う雰囲気を楽しんでいるとのこと。また、家族や友達がスタジオに遊びに来てくれたりFAXをくれたりと、コミュニケーションの面でも面白いと話しています。子どもたちにはFM局から収録風景の写真付きCDがプレゼントされます。

インタビュー余話

浅沼さんはクラブ活動が忙しくて時間が取れない中高生にもぜひ「もこもこ」に参加してもらいたいと活動の広がりにも意気込み意欲的である。参加者、運営者としてさまざまな世代がいろいろな形で「読書」を通じて係わり合いを持ち「一人でも多くの人たちの心に“読書”を残してもらえる」ことが夢なのだそうです。

北海道地域活動振興協会理事長賞

十勝管内 大樹町

源氏を読む会

【団体の概要】

設立年月

昭和56年

会員数

15名

代表者名 武井敬宣

源氏を読む会は昭和56年に町立図書館で開かれた古典講座の受講生が終了後も自主的に勉強を続けたいと発足させた読書会のグループです。“源氏物語”という一つのテーマを追い求め続けて今年で27年目。発足当初から代表を務める武井さんにこの老舗読書会のひみつ？についてお話をお伺いしました。

ほんの偶然が27年

代表の武井さんは昭和51年から平成元年まで長い間町立図書館の館長さんを勤めてこられた方です。源氏物語に興味を持ったきっかけも当時、町立図書館で館長をしていた武井さんが“たまたま頭数の一人”として古典講座に参加させられた(本人談)のがそもそもの始まりだったそうです。源氏物語と聞いても、知識はあっても初めの頃は興味も何もなかったのが、いまや27年を越える活動にまで発展するとは本人にも予想もしなかったそうです。その読書会の様子について……。

充実への27年間

発足当時は月1回の読書会から始めましたが、現代語訳ではなく原文も読んでみたいと、3年目からは原文を主体に読んでいくように変えました。また、読書会も月2回に増やしたそうです。さらに、平成2年には勤めを抱えている方でも参加できるようにと夜の部を設けました。



例会では、全員で原文を音読してそれから訳文も音読します。初期の頃は現代語訳を中心に読んでいましたが、円地文子、谷崎潤一郎、与謝野晶子、中井和子のそれぞれの翻訳版を原文と見比べながらそれぞれ音読していくそうです。先行する昼の部の会員は現在源氏物語後段の“宇治十帖”に取り組んでいるそうです。

昼の部の例会は図書館を利用しますが、夜の部は閉館している図書館に代わって福祉センターを会場に利用しています。共に会場は無料で借りるとのことができるのがありがたいとのこと。

近年では“場”の提供というコミュニティ施設の面でもクローズアップされている公立図書館ですが、源氏物語のテキストの協力など「源氏を読む会」の長年の活動拠点に陰で支え続けてきた町立図書館の力も大きいと武井さんは話します。

発足以来の例会回数は現在 676 回を越えて続けられています。

源氏物語をめぐる「旅」

今回の受賞については、「(27 年間)好きなことをして、それでもらえるんだからありがたいとしか言いようがないね～」とあくまで控えめに話す武井さん。昨年には会の仲間とともに京都を中心に“源氏物語”ゆかりの地を巡る旅も始め、2 回目の今年も 8 名で出掛けたそうである。ゆかりの地ということで奈良の長谷寺まで足を伸ばしたというから本格的である。因みに武井さんは今年で 88 歳！



源氏物語には主語がないため、細心の注意を注ぎながらなおかつ想像力も駆使して読み進めなければならなくて大変なのだそうだが、逆にそこが面白さであり特に心理小説としても評価が高い点で今に通じる現代的なものなのだという。

1200 年も前に書かれた昔の話のどこに惹きつけられるのか魅力について尋ねてみると、古びないところだという。一度尼さんになったはずの女が、後に宮仕えに戻っているなど、生身の人間が書いた故の誤りや思い違いもコンピュータ時代にはない味わいに思えてくると言うから面白い。

インタビュー余話

宇治十帖までいったから後もう少しという話が聞けるかと思いきや、まだまだ魅力の探究は道半ばといった口調の武井さん。池波正太郎や藤沢周平など、時代小説という食べ物描写がすぐに頭に浮かぶが、源氏物語では食べ物描写がほとんど無いこと、主語がないこと等など目からウロコのインタビューとなり、興味深い話は尽きるともなく熱を帯びて続いていきました。

夜の部は昼間よりも平均年齢が若いそうで、「男性会員もいるんだよ」とうれしそうに話してくれました。まだまだ源氏物語の魅力は、さまざまな人たちに広く深く沁みこんでいくことでしょう。

特集 優良読書グループ表彰

わが国における読書推進団体の草分けである“社団法人読書推進運動協議会”は、昭和43年から文化の日に合わせた「読書週間」に「優良読書グループ表彰」(全国表彰)を主催して各都道府県から1団体ずつ表彰してきました。北海道読書推進運動協議会では、この表彰事業に合わせて会独自の表彰事業を毎年実施してきており、地域で活躍する読書グループを毎年表彰しています。

平成17年度からは、財団法人北海道地域活動振興協会様の協力により理事長賞も創設され、より多くの読書グループを表彰できるようになりました。

過去3年間に表彰を受けた読書グループ

年度	表 彰	管内	市町村名	受 賞 グ ル ー プ 名
平成17年	全 国 表 彰	石狩	札幌市	読み聞かせグループ「マーガレット」
	北 海 道 表 彰	石狩	札幌市	読み聞かせの会「わらび」
		石狩	恵庭市	おはなしさんた恵夢
		上川	美瑛町	お話し会「あいあい」
		網走	北見市	北見お話の会
		胆振	苫小牧市	苫小牧子どもの本の会
	北海道地域活動振興協会理事長賞	空知	三笠市	おはなしの会「グリとグラ」
		胆振	平取町	ふれあいサークル
		十勝	新得町	おはなし会「スキップ」
	平成18年	全 国 表 彰	上川	旭川市
北 海 道 表 彰		石狩	札幌市	おはなしの会「てるてる」
		石狩	江別市	風の子文庫
		空知	由仁町	おはなし会「わらべ」
		網走	湧別町	こぐま会
		網走	湧別町	リーディング倶楽部たんぽぽ
北海道地域活動振興協会理事長賞		十勝	大樹町	図書館ボランティア「どんぐり」の会
		釧路	厚岸町	ちいさな絵本箱
		根室	根室市	中高生ブッククラブB・LOVERS
平成19年	全 国 表 彰	十勝	帯広市	十勝童話会
	北 海 道 表 彰	石狩	千歳市	おはなしの会「ピノキオ」
		石狩	江別市	読み聞かせボランティアの会
		空知	岩見沢市	こども読書会ボランティア
		留萌	留萌市	ボランティアサークル 手づくり布の絵本「ひよこの会」
		胆振	白老町	おはなし会トトロ
	北海道地域活動振興協会理事長賞	空知	滝川市	ひまわりのおはなしやさん
		留萌	留萌市	おはなしの会「もこもこ」
十勝		大樹町	源氏を読む会	

北読進協だより 第15号 (WEB版)

発行年月日 平成19年12月28日

編集・発行 北海道読書推進運動協議会事務局

〒069-0834 江別市文京台東町41番地

北海道立図書館業務部市町村支援課内

TEL 011 - 386 - 8521

FAX 011 - 388 - 2063(業務部直通)

011 - 386 - 6906
